

奈良時代の鐘楼遺構

— 興福寺鐘楼に関する補論 —

森先一貴

I 序 論

古代寺院では経典を納める経蔵とともに、時を告げる鐘楼が講堂の前方東西に対をなして建てられるのが通例であった。ただし、奈良時代以前の鐘楼の規模や構造については、文献・絵画史料にみえる描写からの推定に大きく依拠せざるをえない上、その姿は一様ではなく、実態は必ずしも明らかではなかった。例えば、『天寿国繡帳』（7世紀前半）には単層の鐘堂が描かれている。他方、現存最古の法隆寺西院鐘楼は平安時代に旧規にならって再建されたと考えられるもので、樓造である。さらに、時代の降るものの中には例えば滋賀県にある重要文化財の石山寺鐘楼（鎌倉時代）のように、樓造で初層に袴腰と呼ばれるスカート状の構造物が付されたものがあり、その初源は不明であった。このように、奈良時代以前の鐘楼の姿は断片的にしか伝わらず、発掘遺構をもってその実態を明らかにしていくことが期待されたところである（西山2004）。

最近、奈良文化財研究所では、興福寺鐘楼跡の発掘調査を平城第625次調査として実施した（森先他2021）。「興福寺境内整備構想」（1998年）に基づき整備を進める興福寺より委託を受けて継続してきた発掘調査の一環である。前掲の文献で報告したとおり、この鐘楼が袴腰付鐘楼であることを発掘調査で明らかにし、それが奈良時代に遡る可能性を指摘した。ただし、紙幅の制約もあり詳細を示すに至らなかった情報があるとともに、その後に追加の室内分析も実施してきた。

本論ではまず、これらの情報を補いつつ興福寺鐘楼の発掘遺構としての調査成果を改めて詳しく提示する。加えて、今回明らかにした興福寺鐘楼の規模や構造の歴史的な位置づけをより明確に示すために、既往の発掘調査で検出された事例を含む奈良時代の鐘楼遺構を集束し、それらとの比較検討を通じて、興福寺鐘楼の歴史的評価を補論する。

II 興福寺鐘楼の発掘調査成果

1 発掘作業の方法と基本層序

鐘楼跡は2016年に奈良文化財研究所が実施した平城第559次調査（奈良文化財研究所

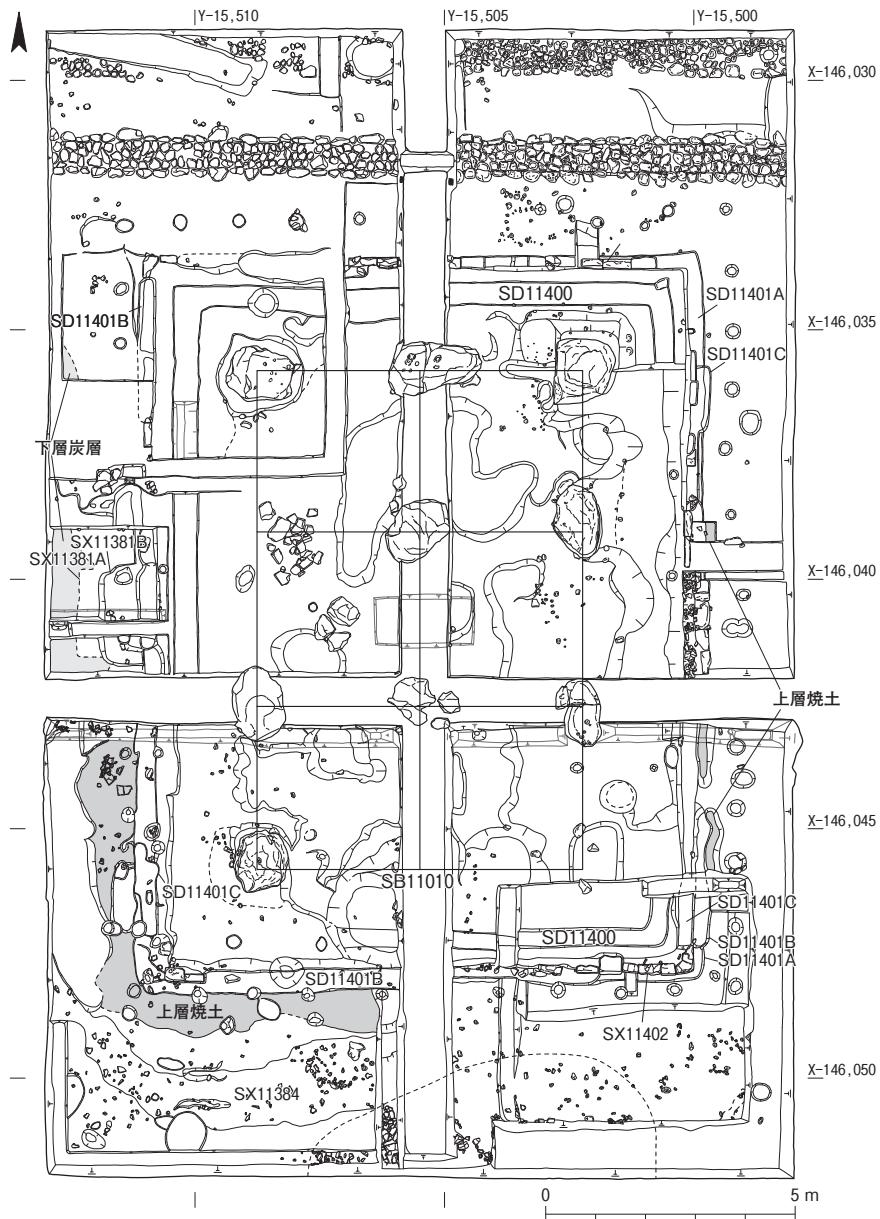


図1 興福寺鐘楼遺構平面図

2018) でも、基壇の部分的な調査を実施していたため、基壇範囲については判明していた。そこで、基壇全体を含む345m²の調査区を設定して発掘作業を実施した。

調査は重機によって表土・造成土・近代の遺物を含む盛土上半および旧調査区埋戻し土を除去したのち、人力によって掘削を進めた。基壇上では、表土の下部に近代以降の盛土があり、その下位で基壇土にいたる。基壇周縁では約20cmの整備盛土の下位に近代以降の盛土があり、場所によってその下位に赤色焼土塊の広がる面を確認した。平城第559次を

踏襲して「上層焼土」と呼称する。基壇西側では、上層焼土の中及びその下位には一部に材の状態をとどめる炭化材を検出した。これらの下位には複数の整地層が堆積する。整地層の多くは褐色砂質の層であるが、含有する炭化物の多寡によって分層可能である。これらの下位には炭化物が濃集した単層があり、「下層炭層」と呼称した。その下に最下部の整地層があり、これは基盤となる礫・砂・粘土を含む層の直上に施されている。

作業を進めるにあたっては、調査区を四分する上端幅80cmの調査用畦を設定した。基壇周囲は上述のように複数時期の様相が重畠しているため、一律に最下部まで掘削することはせず、各時期の状況を保存した調査となるようにした。すなわち、南西区画と南東区画の旧E区以外については上層焼土面までの掘削とし、第559次調査のD区を含む北西区画、北東区画、及び第559次調査E区については最下部の下層炭層ないし最下層整地まで掘削した(図1)。最下層整地まで掘削した区画についても、上層面の状況を隨時記録した。

2 検出遺構

鐘楼の平面規模 鐘楼(SB11010) 基壇には9基の礎石が残存する。長径1.0~1.9mで、柱座などの造り出しがない三笠安山岩の巨石を使用している。礎石には据え直された痕跡はないことから、鐘楼は創建当初から桁行3間(約10.1m、34尺)・梁行2間(約6.5m、22尺)の規模で、柱間寸法は、桁行では中央間が12尺、両脇間が11尺、梁行は11尺等間である。

基壇の構築 基壇の上面には近世以降の搅乱坑を多数検出したものの、基壇周縁の施設の残存状況は良好であった。これにより明らかになった基壇規模は、南北約14.5m(49尺)、東西約11.1m(37.5尺)である。基壇の東西断面の観察によれば、基壇は基盤層のうえに種類の異なる土を積んで構築するが版築は施されない。基壇土の各单位は基壇外側に向けてやや傾斜することを複数断面で確認しており、丘状に積み上げた上で、基壇外装の構築に先立って外周部を切り出していることがわかる。上述のように、礎石には据え直しの痕跡はなく、基壇土の構築とともに設置されており、創建当初の位置を保つ。

基壇外装の構造 基壇外装は羽目石が残るが、多くは抜き取られていた。基壇周縁部では最下層地上位に堆積する赤みを帯びた褐色砂質整地を掘り込む、瓦や白色の礫を含んだ褐色土を埋土とする溝(SD11401A)、上層焼土面から掘り込んだ暗褐色土を埋土とする溝(SD11401B)、近世以降の盛土で一体的に埋められた溝(SD11401C)の3条を認めた(図2)。検出面及び出土遺物からそれぞれ、平安時代・室町時代・江戸時代以降のものと想定した(年代学的検証は後述)。3条の溝は、改修時にそれまでの羽目石を抜き取るとともに、新たな羽目石を据え直した溝でもあり、抜取・据付溝と呼ぶべきものである。興福寺鐘楼は繰り返し罹災しているが、全てにおいて壊滅的な被害を受けたわけではなく、基壇外装の改修にまで及んだ機会は大きく2度であったとわかる。また、基壇北面の羽目石

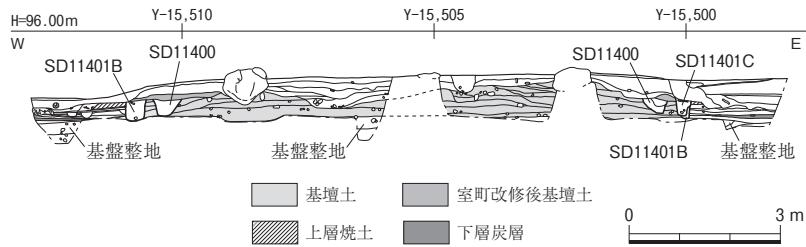


図2 鐘樓SB11010基壇東西断面図

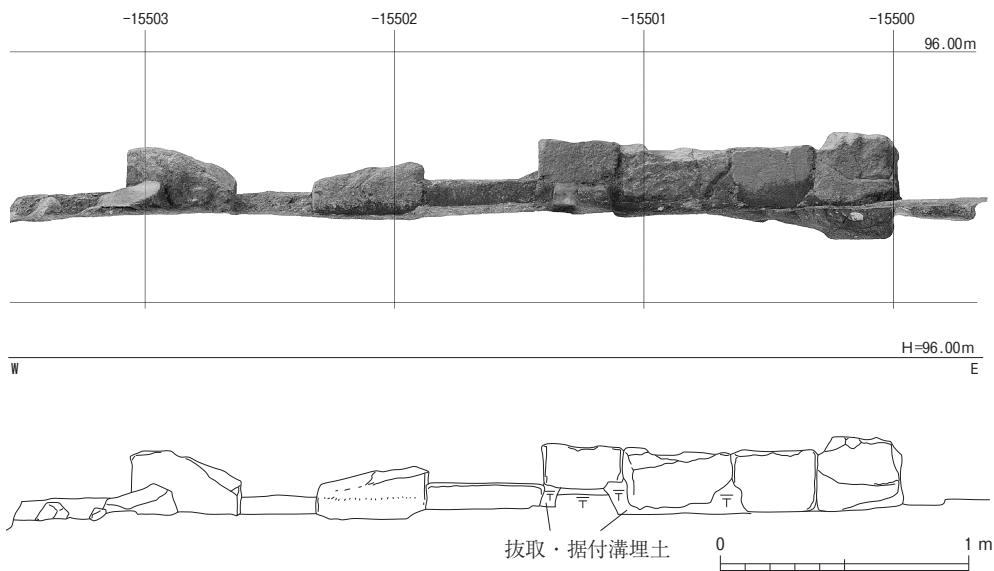


図3 鐘樓基壇南面東側の羽目石列SX11402（南から見た状態。上：3次元モデル、下：立面図）

SX11406・11407や東南部の羽目石SX11402は平安時代の抜取・据付溝に据えられている一方、基壇東面の羽目石SX11408は室町時代の抜取・据付溝に据えられており、現状で認められる羽目石の設置年代は異なっている。さらに、抜取・据付溝底面には、羽目石が抜き取られている箇所において、羽目石の大きさに近似する形状で底面が一段低くなる箇所が複数あり、地覆石の痕跡は認められなかった。基壇南面にのこる羽目石SX11402の立面図に示すように、羽目石底面高には大きくばらつきがあり、また被熱の程度も石材によって異なる（図3）。これらのこととは、鐘楼基壇外装では地覆石を据えず据付溝底面で羽目石上面を揃える工法がとられていたこと、それぞれの羽目石の設置年代が異なる可能性を意味する。なお、どの時代にも基壇周囲に雨落溝は設けられていない。

基壇土の積み足し 土層断面観察の結果、基壇土は後世に一度積み足しが行われていた。この基壇土は室町時代の抜取・据付溝SD11401Bの縁辺を部分的に覆う箇所があるこ

とから、少なくとも室町時代に羽目石を据え直した時より後に基壇土を積み足していることがわかる。基壇周囲には先に述べたように整地が繰り返されていたため、見かけの基壇高は時代が降るほどに低くなつたであろう。

このため、室町時代以降に基壇高を改めて確保する改修工事があつたと推定する。

袴腰地覆抜取溝 さらに、今回の発掘調査を特色づける成果として、基壇上面で検出し

た素掘溝SD11400があげられる。これは積み足し基壇土が削平された西北区画と東南区画において、基壇上面の基壇縁に沿うように設けられた溝である。その規模は南北13.4m、東西10.1mである。基壇外側の壁面が直立する逆台形状の断面をなし、埋土には破碎した凝灰岩片が含まれていた。興福寺鐘楼は、下層部分が袴腰と呼ばれる構造物で覆われていたことが『春日権現記絵』(14世紀初頭)などの絵画史料から知られる(図4)。その位置、断面形状、凝灰岩片の存在からして、この素掘溝は袴腰の基礎を抜き取った痕跡と考える。

階段の構造 絵画資料によれば基壇西面には階段があったと考えられる。階段想定位置では、上層焼土が通常より西側に広くのび、基本層序で述べたように炭化材も厚く堆積するなど、基壇周囲のなかでも特異な状況が認められた。そこで鐘楼南北中軸上に調査用畦を設けて掘削し、羽目石あるいはその抜取溝の屈曲や階段の耳石地覆とみられる溝などから階段位置の推定を試みたが確認に至らず、羽目石の抜取は途切れることなく南に続いていた。ただし、下層炭層が堆積しない範囲が矩形平面をなしていたことから(SX11381A)、この位置が創建階段痕跡であろうと推定した。さらにその位置に一部重複して、階段の裏込土と見られる凝灰岩片などを含む土が認められた。下層炭層はわずかにこの土の下層に潜り込む状況があったため、これを改修後の階段痕跡とみなした(SX11381B)。畦の土層においても羽目石を抜き取ったと見られる複数の溝が認められる。基壇外装には地覆石が認められなかつたことを指摘したが、階段位置においても耳石地覆は敷設されていないと考えられる。階段は裏込土により調整しながら石材を積み上げるような工法が用いられ、この位置を通る羽目石ないし葛石は踏石最上段を兼用した可能性がある。

これらのほか、上層焼土面及びその相当面では基壇の北東と南西に帯状の瓦堆積を確認した(SX11383)。基壇の北東では幅が最大で0.8m、長さ約6m、おなじく南西では幅約1m、長さ約7mの範囲で、基壇を取り巻くように広がる。これらは上層焼土形成時の被災で、鐘楼に葺かれていた屋根材が落下したもの可能性がある。

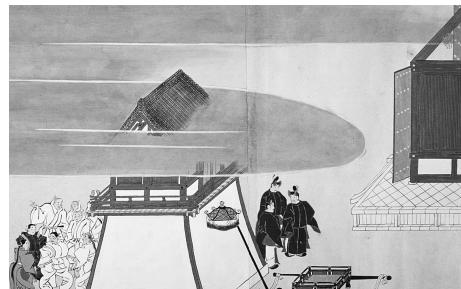


図4 『春日権現記』に描かれた中世の興福寺鐘楼(卷十一より)
(板橋貴雄模写、明治3年)

3 年代学的検討

放射性炭素年代 基壇周囲の複数の整地土については出土遺物量が少ないため、その年代決定のために炭化物の放射性炭素年代測定を実施した（図5、年代値一覧は森先他（2021）を参照）。試料は炭化物・炭化材である。整地土については基壇西側の単一の土層断面を上層から両刃鎌で慎重に掘り下げつつ、ピンセットでサンプリングした。樹痕等による顕著な攪乱は認められなかった。微細な草本の根については入念に除去した。下層炭層から2点、上層焼土から3点、それらに挟まれる複数の整地土から6点の、合計11点について測定対象とし、測定を（株）加速器分析研究所に委託した。このうち、1点は現代炭素の混入であったため除外した。曆年較正はIntCal20によった。

図5に示したのは較正年代範囲である（OxCal4.4.4：cal AD, 2σ ）。下層炭層（1c）が7世紀後半～9世紀、上層焼土（ub）中の炭化材が11世紀～12世紀とまとまる。これらに挟まれる整地土については炭化物の由来が单一ではないと想定されるため、炭層や焼土に比べれば年代値がばらつくが、整地土下半（1s）が7世紀後半～8世紀後半と11世紀～12世紀中頃、整地土上半（us）が11世紀後半からもっとも遅く14世紀の炭化物が含まれており、新旧の逆転などは認められない。

史料による罹災履歴との対応 これらの罹災履歴との対応関係を検討する。鐘楼は平安時代から江戸時代にかけて都合8回罹災している（表1）。下層炭層は元慶年間に記録がある最初の焼失に対応する。整地土下半は平安時代のものと考えられ、これを掘り込む羽目石抜取・据付溝SD11401Aは平安時代の改修にあたるとの想定とも整合する。問題は基壇周囲最上層にあたる上層焼土（ub）とその直下の整地土（us）の年代が逆転する点である。ただし、上層焼土やそこに含まれる炭化材は鐘楼壁材等の鐘樓上部構造そのものに由来する可能性があることから、必ずしも基壇周囲の整地土よりも新しいとは限らない。整地土上半の年代は概ね鎌倉時代に収まることから、古木効果を考慮すれば治承（あるいは建治）年間の焼失後の再建時に平安時代後期の材を用いて構築した壁材が、嘉暦年間の焼失時、すなわち鎌倉時代までの周辺整地土の上に倒壊したと解釈するのが合理的である。この理解は、上層焼土及び最上層整地を掘り込む羽目石の抜取・据付溝SD11401Bに、室町時代に降る土器・瓦等が含まれていることとも矛盾しない。

治承年間の鐘楼の罹災は南都焼き討ちによるもので、甚大な被害が推測される。一方、建治年間の鐘楼の罹災は僧房への落雷が延焼したものとされる。鐘楼も被害を受けたとする記載（『興福寺略年代記』、『三会定一記』）がある一方、その記載を欠く史料もみられ（『中臣祐賢記』）、実際の被害の程度は明らかではない。またこの時に限り再建年も明記されていない（表1）。こうした点もふまえれば、上層焼土中の炭化材は、その年代が11世紀～12世紀であることから治承年間の焼失後、養和元年の再建鐘楼に由来する材である蓋然性

表1 興福寺鐘楼罹災履歴（森先他2021より）

焼失年	原 因	再建年	出 典
1 元慶2年（878）	失火	元慶5年（881）以降	『日本三代実録』
2 永承元年（1046）	民家への放火からの類焼	永承3年（1048）	『興福寺流記』『扶桑略記』『造興福寺記』ほか
3 康平3年（1060）	中金堂からの出火	治暦3年（1067）	『康平記』『扶桑略記』『三会定一記』ほか
4 永長元年（1096）	中室からの出火	康和5年（1103）	『中右記』『後二条師通記』『三会定一記』ほか
5 治承4年（1180）	平重衡の南都焼き討ち	養和元年（1181）	『玉葉』『山槐記』ほか
6 建治3年（1277）	僧房への落雷による火災	再建年不明	『三会定一記』『興福寺略年代記』ほか
7 嘉暦2年（1327）	寺内の紛争による放火	応永5年（1398）	『法隆寺別当次第』『嘉元記』『大乘院日記目録』ほか
8 享保2年（1717）	講堂からの出火	後、再建されず	『南都年代記』『塩尻』ほか

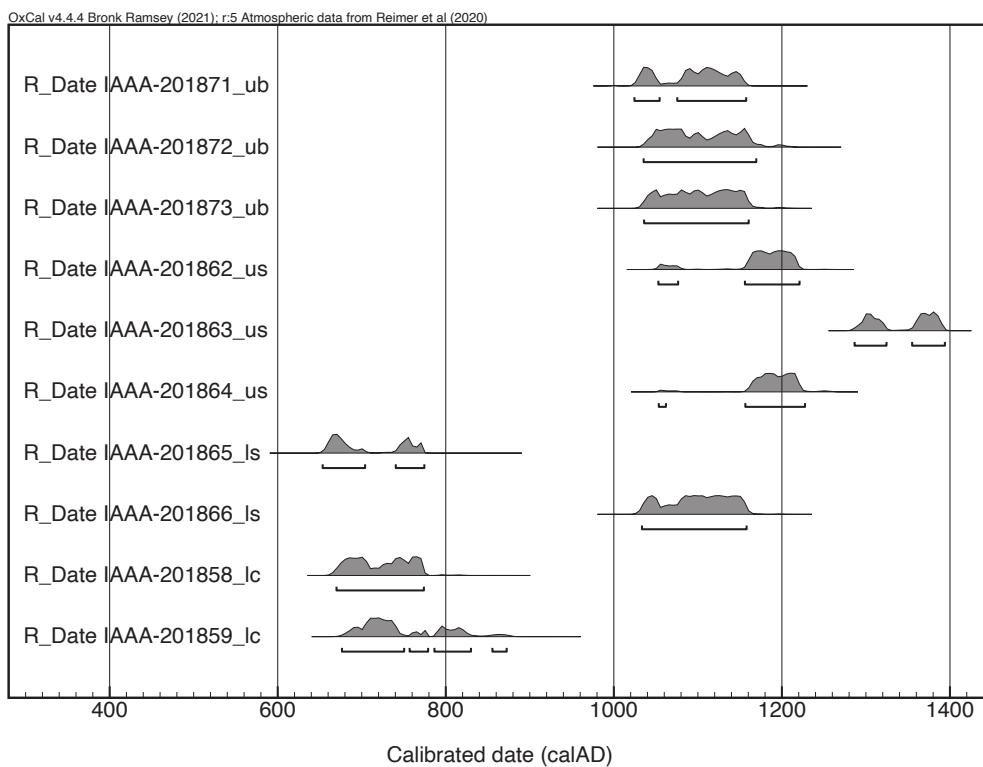


図5 鐘楼基壇西側に堆積した炭化物の暦年較正年代範囲（OxCAL4.4.4）

が高い。建治年間の火災で鐘楼が受けた被害は再建に至るほど大きくなかった可能性もあり、今後とも検討が必要である。

4 鐘楼の上部構造に関する検討

『興福寺流記』には、鐘楼の規模について大小二つの記載がある。一つは経藏（=桁行34尺、梁行22尺）と同規模とする記述で、鐘楼の礎石位置から推定される柱配置に基づく

建物規模と一致する。一方、「弘仁記」(弘仁年間〔810~824〕)には桁行46尺(13.6m)、梁行35.3尺(10.4m)とあり、また「宝字記」も同様である、とも記される。経蔵の規模より一回り大きな「弘仁記」および「宝字記」の記述が何に基づくものかはこれまで判然としなかった。森先他(2021)で報告したように、今回検出した基壇上面をめぐる素掘溝SD11400の南北および東西距離はそれぞれ13.4m、10.1mであり、「弘仁記」および「宝字記」の数値と近似する。このことから、「弘仁記」および「宝字記」に記載された鐘楼の規模は、袴腰下端の平面規模を記していると考えられる。また、このことからみて興福寺の鐘楼が袴腰を備えた時期も、奈良時代にさかのほる可能性がある。

また、基壇西面における土層断面の観察時に、上層焼土直下に白色の薄片が面的に堆積している状況が認められた。これが鐘樓上部構造の外壁仕上げ材である可能性を考慮し、発掘調査中に上層焼土とともにブロックサンプルを採取した。発掘調査中の所見にもとづき、室内でブロックサンプルから白色薄片を採取し、顕微鏡観察及び元素分析をおこなった。発掘調査中の観察では、白色薄片が漆喰か白土である可能性を予測していたが、分析結果から、白色薄片の主な構成要素はケイ素を多く含む非晶質の粒子と考えられた。推測の域を出ないものの、形状的特徴や検出元素、構造などから火山ガラスと推察される。養和再建時の鐘楼の外壁には、火山灰材料を用いた白色塗装がなされていた可能性が考えられる(森先他2022)。

5 興福寺鐘楼の変遷

以上の検討結果から、興福寺鐘楼基壇の変遷は、一部に推測を加えて復元すれば次のような順序を辿ると考えられる(図6)。

【奈良時代創建期】

- 1) 丘状に基壇土を積み上げると同時に、礎石を設置する。
- 2) 外周部を切り出し、地覆石は置かず羽目石を設置する。基壇上面に袴腰地覆石を設置する。鐘楼を建てる。

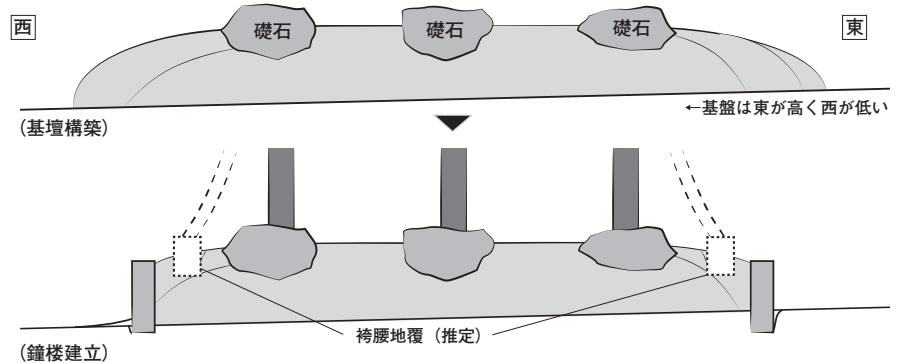
【平安時代】

- 1) 平安時代のいすれかの罹災の後、羽目石の一部を据え直す。据え直しに際しては石材の高さに規格を設けず、羽目石底面で高さ調整をおこなう。あわせて基壇周囲に整地をほどこす。基壇の周囲に対する比高は低下した。治承4年(1180)の焼失後、養和元年(1181)に上部構造を再建する。この再建鐘楼の外壁は、火山灰材料を用いた白色塗装がなされていた可能性がある。

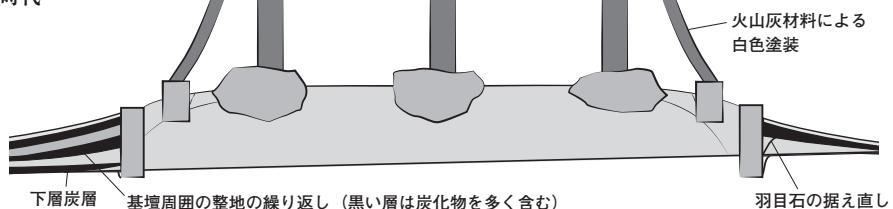
【室町時代】

- 1) 嘉暦2年(1327)の焼失により、おそらく養和年間の再建鐘楼が基壇周囲に焼け落

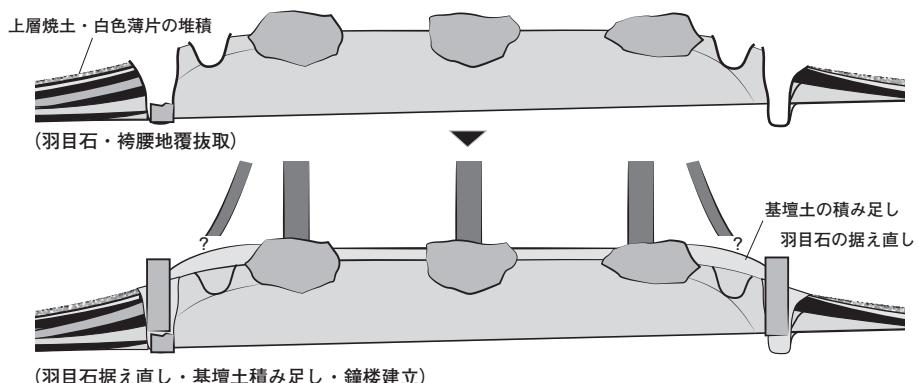
奈良時代創建期



平安時代



室町時代



江戸時代以降

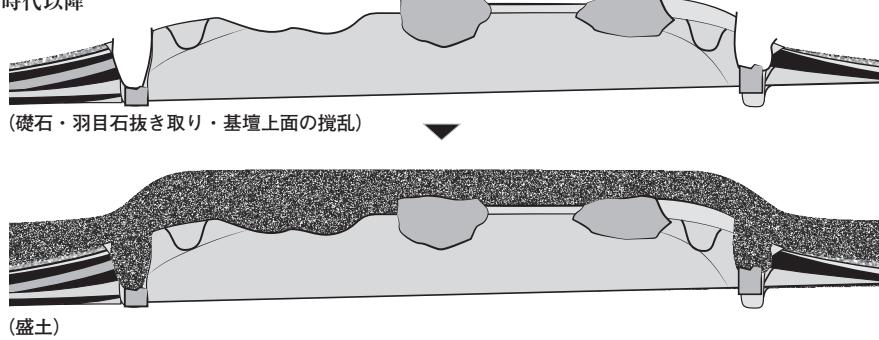


図6 興福寺鐘楼の変遷（東西断面模式図）

ちて堆積する。羽目石の一部を抜き取り（底部に残欠を残す場合がある）、据え直す。

この際、基壇高の確保のため、基壇土を積み足し、羽目石上面の高さを上げる。

- 2) この時期以降の袴腰については遺構としては確認できないが、絵画資料（例えば、興福寺伽藍春日社境内絵図（宝永5年））は鼓楼とともに袴腰を描く。遺存はしないが、割石等を用いた簡易な地覆を有したとも推測しうる。

【江戸時代以降】

- 1) 享保2年（1717）の焼失後は、寺院再建とは関係しない動機による礎石や羽目石の抜き取りがあったとみられる。
- 2) 近代以降、基壇位置の復元のため盛土がなされ、基壇周囲に保護柵が設けられた。

6 経蔵との比較

興福寺と対をなし講堂前面東方に位置する経蔵は、2015年度に発掘調査がおこなわれた（奈良文化財研究所2018）。その規模は桁行3間・梁行2間の南北棟建物であり、柱間寸法、基壇規模のいずれもが鐘楼とほぼ完全に一致する。経蔵の南北中軸ラインはX=-146,040.8を通るが、これも鐘楼と一致する。基壇の構築については基盤上に丘状に積み土をおこなうが、版築を施さない点、基壇外装は地覆石をもたず羽目石を直接立てている点、雨落溝を伴わない点も全く同じである。二つの建物は同一の設計に基づき、計画的な伽藍整備計画のもと建築されている。

異なる点としては、鐘楼では基壇構築の過程で礎石が据えられたが、経蔵では礎石据付穴を報告している点、鐘楼では平安時代・室町時代・江戸時代の基壇外装抜取溝（前二者にあっては抜取・据付溝）を確認したが、経蔵では平安時代に対応する抜取の痕跡は確認されていない点である。基壇外装抜取痕跡の数については、『興福寺流記』では9世紀代の経蔵の罹災記録がはっきりしないことと関係する可能性がある。

また、経蔵では袴腰地覆抜取溝が検出されていない。中世以降の絵画史料では経蔵も袴腰を持つ姿で描かれている。経蔵は近世までの間に鼓楼となるが、経蔵に当初袴腰の痕跡が見られないことと、この建物の性格の変化には何らかの関係があるかもしれない。

III 奈良時代の鐘楼遺構とその規模及び構造

1 奈良時代鐘楼の規模

興福寺鐘楼の規模や構造を、他の古代鐘楼遺構と比較する。古代鐘楼を集成した宮本（1979）、箱崎（2006）を参考としつつ、奈良時代の鐘楼の姿が概ね推定可能な発掘遺構、もしくは経樓・鐘楼のいずれかが不明であっても、両建物想定位置で同一規模の建物が検

表2 発掘調査で検出した奈良時代の主な鐘楼遺構（括弧付は推定復元値）

寺院名	所在地	配置	棟方向	桁行	柱間寸法(尺)	梁行	柱間寸法(尺)	基壇(尺)	文献
大安寺	奈良県	講堂前面西方	南北	(38)	(12.5・13・12.5)	25	12.5・12.5	(63)*50	1
薬師寺	奈良県	講堂後面西方	南北	37.5	12.5・12.5・12.5	25	12.5・12.5	65*53	2
興福寺	奈良県	講堂前面西方	南北	34	11・12・11	22	11・11	49*37.5	3
甲賀寺	滋賀県	講堂前面東方	南北	31	11・9・11	22	5・12・5	(57*38)	4
武藏国分寺	東京都	講堂前面東方	南北	31	10・11・10	20	10・10	(50*39)	5
陸奥国分寺	宮城県	講堂前面東方	南北	30	10・10・10	20	10・10	—	6

文献

1:『年報1974』、2:『薬師寺発掘調査報告』、3:『紀要2021』、4:『近江の古代寺院』『史跡紫香楽宮跡確認調査事業報告書』
5:『国指定史跡武藏国分寺跡附東山道武藏道跡』、6:『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』

出・確認された事例に絞って表2に示した。ここにあげたもののはか、いくつかの発掘調査報告書で鐘楼について記載がある。多賀城廃寺では金堂と講堂の間の東西に経樓と鐘楼が想定されている（宮城県教育委員会・多賀城町1970）。しかし、建物遺構は西側でのみ検出しており、その遺存状態も良好ではなく正確な規模と構造を知り得ない。また、法華寺鐘楼は現在、豊臣秀頼の寄進によるものが建ち、修理事業にともない基壇の調査がおこなわれ創建期の遺構を検出したとある（奈良県教育委員会文化財保存課1956）。しかし、本例も奈良文化財研究所が防災施設改修事業にともなう発掘調査（平城第363次調査）をおこなったところ、現鐘楼下層では中世の礎石据付穴を検出しており、両者の関係が不明となった（高橋・林2004）。讃岐国分寺も鐘楼の可能性が高いとする建物を検出しているが、対象位置に同規格の建物はないため、機能は未確定としている（高松市教育委員会2018）。

表2によれば、柱配置が明らかな鐘楼は一例を除き基本的に桁行3間・梁行2間の南北棟建物である。興福寺鐘楼もこの例に漏れない。鐘楼の位置は講堂付近の東西いずれかに位置することが多いが、経蔵（経樓）と鐘楼が東西いずれに位置するかは必ずしも定まっていない。今回取り上げた奈良時代における鐘楼の規模は、それが主に国家的寺院や国分寺であることもあって、7世紀（川原寺・杉崎廃寺）及び後世のものと比べ大きく、桁行で30尺以上のものがしばしばみられる。なかでも大安寺・薬師寺鐘楼は大規模で、興福寺はそれに次ぐ。

2 鐘楼発掘遺構の検討

大安寺　国家筆頭寺院の大安寺では、講堂前面西方に鐘楼、東方に経樓が位置する（奈良国立文化財研究所1975）。礎石据付掘方とみられる根石群が東西に並んで3基検出されている（図7）。柱間は3.7m（12.5尺）、全長は7.4m（25尺）で、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』にみえる「長三丈八尺、廣二丈五尺」と一致し、これが梁行方向であると判明する。他の鐘楼でも梁行の柱間は桁行の柱間ないし桁行脇間の柱間と一致することから考えれば、桁行38尺は中央間13尺、両脇間が12.5尺の柱間を持つことも推定可能である。したがって、

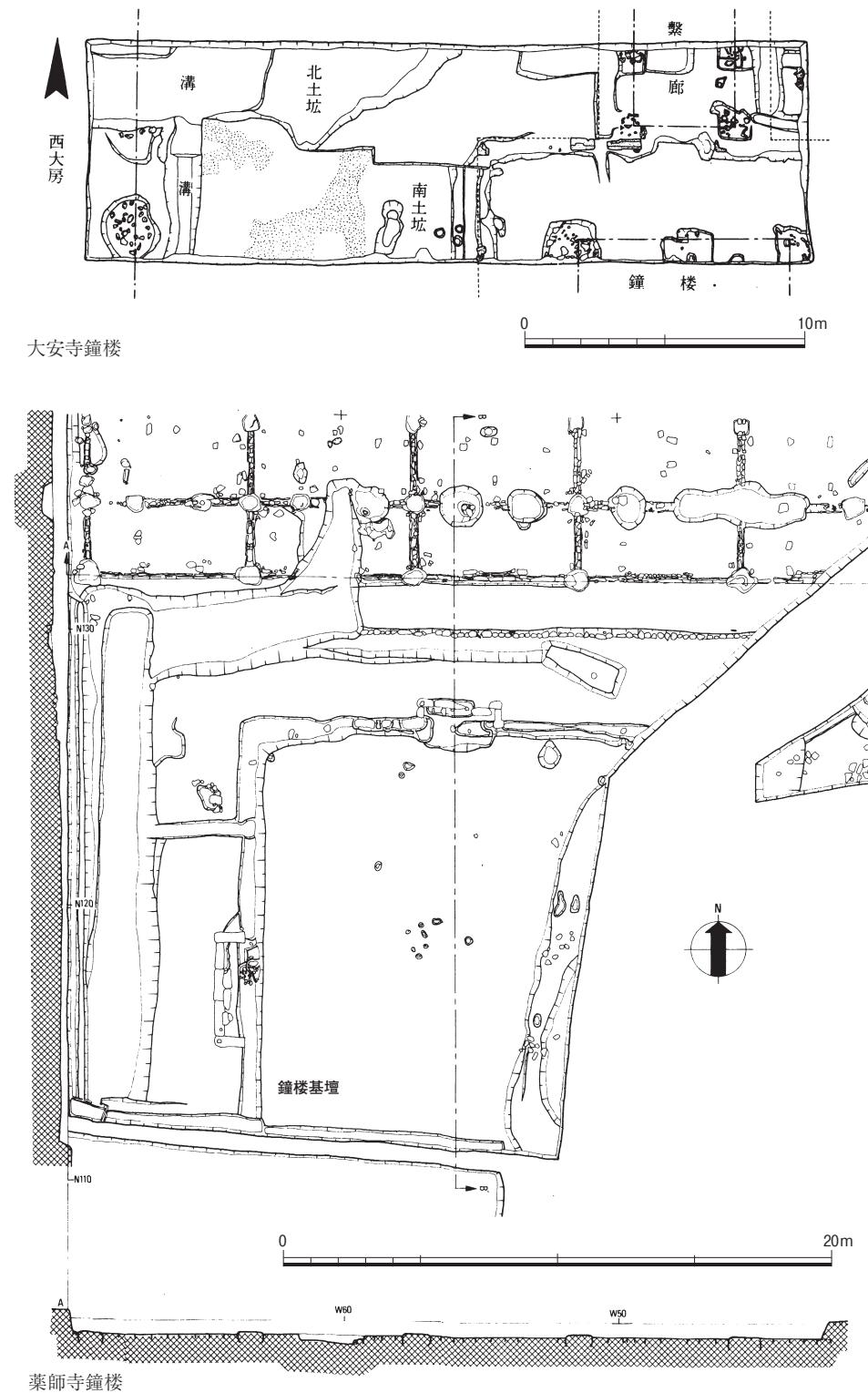


図7 大安寺・薬師寺の鐘楼遺構

本例も桁行3間・梁行2間の南北棟と考えられ、その規模は随一である。基壇外装に地覆石の一部が残る。側柱心から北・西面地覆石ラインまでの距離は3.7m（12.5尺）であることから、基壇東西規模は14.8m（50尺）であり、南北規模もおよそ18.5m（63尺）と復元可能である。基壇上面には削平が強く程度及んでいるとされ、据付掘方以外の遺構は認められない。大安寺では鐘楼と講堂西軒廊が繫廊で結ばれるため、北面には階段ではなく、西面については存在するとしても調査区外にあたる。

薬師寺 絵画資料の検討から講堂後面西方で検出した基壇建物が鐘楼跡と考えられている（奈良国立文化財研究所1987）。基壇の3分の2を検出している（図7）。基壇は大きく削平を受け、礎石据付の痕跡もほとんど見られないが、部分的に凝灰岩や玉石の散布が見られ、礎石位置の地業痕跡と解されている。基壇周囲には羽目石の抜取溝と、石階段の地覆石と段石の一部が残る。地業痕跡の位置を考慮すると柱間寸法が12.5尺に復元されるといい、長和4年（1015）の『薬師寺縁起』にある記載（長さ三丈七尺、広さ二丈五尺）と一致するとされた。このことから、桁行3間・梁行2間で基壇の出は各14.5尺と復元され、基壇規模は南北65尺・東西53尺と推定された。基壇北面・西面のみの検出であり、礎石位置も正確にはわからないが、階段位置と史料記載が正しければこれ以外に別案は考えにくい。なお、基壇北面の羽目石は石階段の内部には通らないが、西面では石階段内部を貫通する。地覆石をもたず羽目石を直接立てたと考えられている。

甲賀寺 史跡紫香楽宮跡内裏野丘陵地区（小笠原他1989、滋賀県教育委員会2009）では、過去の発掘調査を通じて東大寺式伽藍配置をとる寺院遺構の存在が明らかにされてきた。また、2004～2007年に滋賀県教育委員会による内容確認調査が実施されている。講堂前面東西に建つ礎石建物が経樓・鐘楼であるとされ、東が鐘楼とされるが、発掘調査は西側建物についておこなわれた。地表に露出した礎石の配置は東西共通である。柱配置はやや特殊であり、桁行方向は3間であるが、梁行方向に4基の礎石が並び、隅位置にあるものが大ぶりで妻側のものがやや小ぶりの3間と推定されている。経樓側の確認調査の結果ではこれらの礎石は動かされていないこと、基壇が存在し、その規模は各面で柱心から2.4mであることが指摘された。この特異な配置は、中門と講堂を結ぶ回廊が接続することによるためかもしれない。中心伽藍をなす回廊が鐘・経樓に接続する構造は他に見られないため、これらの礎石建物の機能についても更なる検討が必要である。

武藏国分寺 国分寺市教育委員会による継続的な発掘調査によって、講堂前面東西に鐘・経樓が推定されている（国分寺市教育委員会2013）。東側が鐘楼とされているが、厳密には経蔵との区別がなされているわけではない。礎石据付穴がよく残り、基壇をもつ桁行3間・梁行2間の建物であること、掘込地業をもつこと、それらには版築が施されるなど堅牢な構造をもつ。その規模も桁行31尺・梁行20尺と大きく、大国の国分寺としての格式

は鐘楼にも反映されていたとみられる。基壇の部分的な断割調査が行われているが、基壇上に袴腰が巡るような状況は検出されていない。創建期の基壇外装については後世の改修で失われており、階段痕跡や雨落溝も認められなかった。

陸奥国分寺 やはり令制國の大國である陸奥国の国分寺は、宮城県教育委員会により1950年代におこなわれた発掘調査で検出された（宮城県教育委員会1961）。講堂前面東西に同規模の礎石建物があり、東が鐘楼跡と推定された。通例どおり桁行3間・梁行2間である。桁行の柱間寸法が等間となり武藏国分寺よりわずかに小さいが、やはり官大寺にせまる規模である。ただし、基壇はもたず、礎石回りに他の遺構は認められないうえ、雨落溝の痕跡も検出されなかった。

3 興福寺鐘楼の特徴

奈良時代の鐘楼遺構を通覧すると、興福寺鐘楼は大国の国分寺より大きく、大安寺や薬師寺などの官大寺に次ぐ規模を有していた。また、興福寺鐘楼の基壇は、外装に地覆石を持たず羽目石を直接立てる工法であるが、薬師寺のような大寺にも同種の工法が認められた。また、薬師寺の西面階段では、羽目石がその内部を通るという点が興福寺と共通する。階段は、大安寺では調査区外に存在するとみられ、その他には類例が検出されてはいないことから、基壇高との関係でその要不要が決まるのであろう。また、今回あげた事例の中に雨落溝が基壇周囲を巡る例は認められない。興福寺鐘楼の基壇外装の構造や雨落溝の不在が特異というわけではない。

今回の興福寺鐘楼SD11400は、かつて「袴腰付鐘楼の場合、袴腰底部には地覆石が据えられていたと考えられますから、この地覆石の痕跡が検出できれば、袴腰付の建物であった可能性が強くなります」（西山2004）と予想されていたものに合致する発見である。興福寺鐘楼以外には、遺構として袴腰の痕跡を検出した事例は確認できなかった。興福寺鐘楼は、現存事例では平安後期以降に一般化する袴腰付鐘楼の、現時点で最古の事例であることを改めて確認した。

奈良時代の写本とされる『絵因果經』（亀田編1977）は、釈迦の半生とその因縁としての前世の話を経文と絵で記した経典であるが、この中に袴腰を持つ樓門が描かれている。描写的の厳密さには欠くとされるが、このような外觀の建築はすでに知っていた可能性があり、奈良時代においても袴腰付建築物の存在はありうる（宮本1979）。

留意すべきは、興福寺鐘楼のように基壇上のひとまわり内側に袴腰地覆石がめぐる場合以外にも、袴腰基礎が基壇外装の上端に据えられる場合も想定できる。このような場合には今回のような方法で袴腰の痕跡を見出すことは期待できないことにも注意が必要で、基壇外装の石材上面に風蝕差が認められないかなど慎重な観察が求められよう。

IV 結 論

本論では、興福寺鐘楼の規模や構造、変遷に関する補論をおこない、さらに奈良時代の鐘楼遺構との比較検討をおこなうことで、興福寺鐘楼の特色を浮き彫りにすることを試みた。検討結果を以下のように整理し、結論とする。

- 1) 興福寺鐘楼は創建以来、桁行3間・梁行2間、基壇外装は羽目石を直接立てる構造で、袴腰を備えた構造であったと考えられ、西面に階段をもつ。袴腰付鐘楼は、現存事例で平安時代後期以降のものが知られていたが、奈良時代にまで遡る可能性がある。袴腰外面は、養和元年の再建時には火山灰材料を用いた白壁塗りとされた。
- 2) 興福寺鐘楼は史料上、複数回罹災したことが指摘されてきたが、損害程度は詳細が不明であった。発掘調査からは、基壇の大幅な改修を伴うような被害は少なくとも平安時代と室町時代にあったことが判明した。また、年代学的検討からは治承の焼き討ち以後に上部構造の本格的な再建があり、嘉暦年間に焼失したと推測できる。さらに享保年間の焼失を含めると、少なくとも四度、甚大な被害を受けた。
- 3) 経蔵と鐘楼は袴腰の有無を除けばほぼ同一の建築規格を有し、中軸ラインも一致することから正確な設計のもと一体的に建築されたと考えられる。絵画史料によれば、経蔵についても中世以降、近世までの間に袴腰を備えた姿になると見られる。それが「鼓楼」へと性格を変えた時期に一致するかどうか、今後検討が必要である。
- 4) 興福寺鐘楼の基壇構造や柱配置は奈良時代の鐘楼建築において異質なものではないが、その平面規模において官大寺に次ぎ、大国の国分寺を凌ぐという位置にあった。事例が少ないため、また創建年は厳密に一致しないため、さらなる検討が必要であるが、寺格に応じた規模を有していたと予想される。
- 5) 袴腰付鐘楼は興福寺鐘楼に特有のものであった可能性もあるが、当時において袴腰付建築物の存在がすでに知られていた可能性は十分ある。袴腰地覆石抜取溝や、基壇外装の精密な観察により、今後の発掘調査を通じて類例が追加されると期待できる。

謝 辞

本論の執筆にあたり、箱崎和久、馬場基、山本祥隆、山崎有生、脇谷草一郎、村田泰輔、中田愛乃、金田明大、山口欧志（以上、奈良文化財研究所）の各氏から協力を得た。記して感謝申し上げる。

参考文献

- 小笠原好彦・田中勝弘・西田弘・林博通 1989 『近江の古代寺院』 真陽社
亀田孜編 1977 『日本絵巻物全集1 絵因果経』 角川書店

- 国分寺市教育委員会 2013『国指定史跡武藏国分寺跡附東山道武藏路跡—平成23年度保存整備事業に伴う事前意向確認調査—』 国分寺市教育委員会
- 滋賀県教育委員会 2009『史跡紫香楽宮跡（内裏野丘陵地区）確認調査地形報告書』 滋賀県教育委員会
- 高松市教育委員会 2018『特別史跡讃岐国分寺跡I—保存整備事業に伴う発掘調査報告書—』 高松市教育委員会
- 奈良県教育委員会文化財保存課 1956『重要文化財法華寺本堂南門鐘樓修理工事報告書』 奈良県教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1975『奈良国立文化財研究所年報1975』 奈良国立文化財研究所
- 奈良国立文化財研究所 1987『薬師寺発掘調査報告』 奈良国立文化財研究所学報第45冊 奈良国立文化財研究所
- 奈良文化財研究所 2018『興福寺 第1期境内整備事業にもなう発掘調査概報Ⅷ』 興福寺
- 西山和宏 2004「梵鐘を吊る建物・鐘楼」『古代の梵鐘』 奈良文化財研究所飛鳥資料館 pp.23-33
- 高橋克壽・林正憲 2004「法華寺の調査」『奈良文化財研究所紀要2004』 奈良文化財研究所 pp.158-165
- 箱崎和久 2006「川原寺の調査—133-12次」『奈良文化財研究所紀要2006』 奈良文化財研究所 pp.74-81
- 宮城県教育委員会 1961『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』 宮城県教育委員会
- 宮城県教育委員会・多賀城町 1970『多賀城跡調査報告I—多賀城廃寺跡—』 吉川弘文館
- 宮本長二郎 1979「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」『日本古寺美術全集 第二巻 法隆寺と斑鳩の古寺』 集英社 pp.97-104
- 森先一貴・神野恵・和田一之輔・山本祥隆・山崎有生 2021「興福寺境内の調査—第625次」『奈良文化財研究所紀要2021』 奈良文化財研究所 pp.159-174
- 森先一貴・村田泰輔・中田愛乃・脇谷草一郎 2022「興福寺鐘樓出土白色薄片の材料分析—第625次」『奈良文化財研究所紀要2022』 奈良文化財研究所 pp.220-221
- Bronk Ramsey, C. 2021. OxCal v4. 4. 4
- Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Ramsey, C. B., Butzin, M. et al. 2020. The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62 (4): 725-757.

挿図出典

図1：森先他2021、図210

図2：森先他2021、図211

図3：奈良文化財研究所埋蔵文化財センター（金田・山口）計測・作成

図4：国立国会図書館所蔵、国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1287496?tocOpened=1>) より引用（最終閲覧日：2022年10月27日）

図5：C. Bronk Ramsey 2021、OxCal v4.4.4により筆者作成

図6：筆者作成

図7：報告書より転載